

はちの医師会の手紙

NO. 657

令和 6 年 3 月 20 日

八戸市医師会



巻頭言 天災は忘れていなくてもやって来る

(表紙題字：元八戸市医師会理事 小坂 康美)

目 次

表紙絵解説	大池 薫	2
☆巻頭言☆		
天災は忘れていなくてもやって来る	水野 豊	3
令和6年2月定例理事会		4
令和6年3月理事会・役員会		14
☆学 術☆		
日医生涯教育講座		22
第18回八戸地区思春期問題連絡懇談会		23
令和5年度全国医師会勤務医部会連絡協議会		24
☆臨床検査・診療メモ☆ 疥癬について		34
食品取扱従事者検便検査におけるリアルタイム PCR 法の導入に 向けて	八戸市医師会臨床検査センター	35
☆倶楽部だより☆ 第38回三師会麻雀大会		37
八戸市休日夜間急病診療所利用状況		39
ドイツ留学思い出昔話45. ドイツ留学に際して指導・支援して下さった恩人たち(2) (帷子康雄先生, 境 繁雄先生)	橋本 功	40
デーリー東北新聞社提供		42・43
研修～リレー日誌～		44・45・46・47・48
八戸市医師会誌投稿規定		49
会員消息		51
事務局日誌メモ		51
行事予定		52
広報委員会より		52
編集後記		52

表紙絵解説

福寿草

福寿草の柔らかな黄色を眺めていると冬の終わりを感じ、少しウキウキした気持ちになります。眠っていた大地が、目を覚まして、これから何かが始まるような予感がします。冬の長い北国では春が待ち遠しくなる季節です。

この一年、私の拙い写真とコメントを見ていただいて、本当にありがとうございました。頭をかかえてコメントを考えるのは、私にとって脳トレにもなり、いい時間でした。

(大池 薫)

巻 頭 言

天災は忘れていなくてもやって来る

八戸市立市民病院 院長

水 野 豊

今年の元旦は穏やかで、のんびりとサッカーの日本代表とタイ戦をテレビ観戦していました。日本の勝利に終わり、森保監督のインタビューが始まった時にあの嫌な緊急地震速報が流れ、能登半島で最大震度7！大津波警報発令！と発表され、次々と定点カメラの画像が映し出されました。それを見て3.11を思い出さずにはいられませんでした。元旦早々何ということでしょう、まずは地震で被災された方々に心よりお見舞い申し上げるとともに、災害支援に入られている方々に敬意を表したいと思います。

3.11の時には当院は幸い建物自体に大きな損傷はありませんでしたが、発電用の重油や医療用酸素が不足し病院機能を維持するのが困難になる危機に直面しました。昨年8月には当院の自家発電機が突然故障し電力不足に見舞われ機能縮小の憂き目に遭いました。いずれにおいてもライフラインの確保がいかに重要かを痛感させられました。昨年災害拠点病院の指定要件の一部改訂があり、浸水想定区域に所在する場合には自家発電機の高所移設や排水ポンプ設置等による浸水対策の強化が求められました。正に当院も該当しますので、自家発電機の治水対策は急務です。当院では災害時における事業継続計画（BCP）を策定しておりますが、震災に関することが主たる内容になっており、昨今の想定外の災害に対応するには不十分で、今後も引き続き改定していく必要があります。

見えざる敵は災害だけではなく、感染症も突然襲ってきます。当院は2018年にバンコマイシン耐性腸球菌（VRE）の院内感染に直面しました。この菌自体は健常者には無症状であることが多いため、知らずに便や尿から延々と排泄され医療者等によって伝搬されます。よって、感染を防ぐのが非常に厄介で当院でもVRE感染を克服するのに非常に苦労しました。

ほっとしたのも束の間今度は新型コロナウイルス感染症のパンデミックに直面しました。収束に向かうまでこれほど長期にわたる対策を強いられるとは予想できませんでしたが、今回当院の感染対策室が新型コロナとの3年間の壮絶な戦いを総括し、来るべき新たな感染症に備えるため、実に184ページにわたって感染症発生時のBCPを作成してくれました。

震災に続き2日に起きた羽田空港の飛行機事故における日航機の奇跡の脱出劇は、客室乗務員の訓練の賜物であると称賛されました。この事はマニュアルを作成したとしても、確実に実践できるようにするには訓練が必要であることを如実に表しています。当院でも大規模災害訓練を行っていますが、例年医師の参加が少ないのが現状で不安が残ります。私自身は昨年災害対策本部長として初めての訓練でしたので疲弊しましたが良い経験を積みました。今後も訓練を通して経験値を上げていくことが重要ですし、PDCA（plan-do-check-act）サイクルを回しBCPを改良していくことも必要です。感染対策にしても同じことが言えると思います。

当院は災害拠点病院であるとともに第二種感染症指定医療機関にも指定されています。災害や感染症発生時には病院機能を維持しながら地域の医療機関を支援しなければならない使命があります。当然、当院として備えを万全にしていける必要がありますが、本年1月号の巻頭言で熊谷会長が述べられているように、事前に地域の医療機関や行政などが連携して対策を講じていくことも重要であると思います。そこに当院が積極的に関わって行くことも使命だと思っています。寺田寅彦は「天災は忘れたところにやって来る」と言いましたが、最近では「天災は忘れていなくてもやって来る」ようになりました。それに対する備えは待ったなしの状況です。